

## 連体修飾の使用状況に関する一考察

小熊利江 品川直美 山下直子 米沢久美子

### 要旨

言語能力の発達について、これまで様々な角度から調査、分析が行われてきたが、本稿では、連体修飾節を尺度としてその発達過程を調査した結果を示した。日本人小学生から大学生を対象とした調査においては、内田(1996)の縦断的調査結果を踏まえて分析を行った。その結果、学年の進行に伴い(1)全名詞数に対する連体修飾節の割合の増加、(2)付加型においては、必須補語の被修飾名詞の割合の増加、(3)内容補充型においては、被修飾名詞の延べ数、異なり語数ともに増加の傾向が見られ、その被修飾名詞には抽象的な意味を持つ語や漢語が増えることなどが明らかになった。また、日本語学習者の連体修飾節の使用状況もあわせて調査、検討した結果、日本語母語話者と比べて連体修飾節の使用が量的には少ないが、付加型と内容補充型の使用比率においては大学生と同程度であることなどがわかった。

[キーワード] 言語能力の発達 連体修飾節 被修飾名詞  
付加型 内容補充型

### 1. はじめに

小学生から大学生までの作文能力の発達について、成田・宗我部・田中(1997)では、語彙習得及び拡充の視点から分析し、発達に「長い文が書けるようになる段階」「複雑な文が書けるようになる段階」等があるととらえている。本研究では文の長さ、複雑さの要因の一つとして連体修飾を取り上げ、その発達過程の分析を試みる。

### 2. 先行研究

内田(1996)では、児童50名が小学校6年間に毎年書いた作文をデータとして、児童の言語能力の発達を連体修飾節の使用状況から分析する。そして、連体修飾節の使用頻度は学年が高くなるにつれ増加の傾向を示し、特に内容補充型の比重が学年進行とともに相対的に増加することなどを明らかにしている。なお、作文は学年ごとに文集としてまとめられていて、題は自由である。特に6年生は卒業記念文集でもあり幅広い題材を扱っている。長さは1・2年生が

600字前後、3・4年生が800字前後、5・6年生が1000～1500字前後である。

連体修飾節については、様々な研究がなされているが、奥津（1974）と寺村（1992）は構造上の関係からその分類を始めている。奥津は被修飾名詞が修飾節の中に組み込める名詞である場合を「同一名詞連体修飾」、そうでない場合を「付加名詞連体修飾」とする。寺村は前者を「付加的修飾」又は「内の関係」後者を「内容補足的修飾」又は「外の関係」と呼ぶ。

内田は両者の分類を枠組みとし、以下のように分類している。

### 1. 付加型

#### 【例文】

- a. 一般的なもの 手は神様がくれた宝のものです。
- b. 短絡しているもの 頭の良くなる本（寺村より）

### 2. 内容補充型

#### a. 普通の内容補充

- ・発話 「手当てをする」という表現がある。
- ・思考 私は人一倍手を大切にしている自信はあります。
- ・コト 自分に手があったことに本当にかんしゃしている。
- ・行為 手をつなぐ行為から友情が生まれることもある。
- ・知覚 つくえの上でえんぴつを使う音。
- ・感情 ただ貸してほしいという気持ちで、引っぱったのである。

#### b. 相対的補充

- ・とき 私は、この作文を書く前まで、手はやく立っているという  
ことは、あまり感じていなかった。
- ・ところ ほうちょうで切ったあと（跡） だと言いました。
- ・量 手は、その人の生きていた分だけいろいろなことを経験する。
- ・事柄の関係 指先のうずまきは、人類がこうまでも発展した理由の  
一つに入っているに違いない。

### 3. 研究目的と方法

#### 3. 1. 研究目的

内田（1996）では、調査対象を小学校1年生から6年生の児童に限っており、中学生以上の段階での調査は課題として残されているが、本研究では、データに中、高、大学生のものも加え、児童から成人に至るまでの連体修飾節使用の量的、質的変化の追跡を試みる。更に、母語における言語能力、認

知能力が成人とみなされる日本語学習者にも調査の目を向け、第二言語における連体修飾節の使用状況を日本人大学生の分析結果と比較する。

- 1) 小学生から成人までの連体修飾節および被修飾名詞の使用状況を通して言語能力の発達過程を明らかにする。
- 2) 日本語学習者と日本語母語話者の連体修飾節および被修飾名詞の使用状況の相違点を明らかにする。
- 3) 内田の縦断的研究結果に横断的研究結果を照らし合わせることで、連体修飾節の発達過程をより明らかにする。

### 3. 2. 研究方法

分析の対象としたのは、お茶の水語彙研究会による平成8年度科研費研究の際に集められた作文で、お茶の水女子大学附属小学校1～6年生、同中学校1～3年生、同高等学校1～2年生の各学年40名と、同大学生40名、日本語学習者40名の合計520名が書いた「手」という題のもの(1992.12～1993.1に実施)である。日本語学習者の内訳は、中国語話者21名、韓国語話者8名、英語話者5名、その他6名、日本語学習歴はいずれも1年以上である。作文を書くにあたって、「これから『手』という題で作文を書くことにします。どんなことを書いても自由です。原稿用紙1枚(400字)に書きましょう。」という指示のみが与えられ、制限時間は設けられなかった。

これらの作文から、内田の基準に従って連体修飾節とその被修飾名詞を取り出し、以下の点において分析を行った。(注1)

注1…本研究では、以下の表現は連体修飾節とは性格を異にすると考え、『日本語の文法(下)』(国立国語研究所)の分類に従い、調査の対象から除いた。

- ・ムードの助動詞表現に準ずる用法…「～はずだ」「～わけだ」「～ものだ」「～する、～している、～した、～していた+ところだ」「～ことだ」「～つもり」
- ・陳述度の低い名詞節(句)…「～することがある」「～したことがある」「～することができる」「～することにする」「～することになる(決まる・決める)」

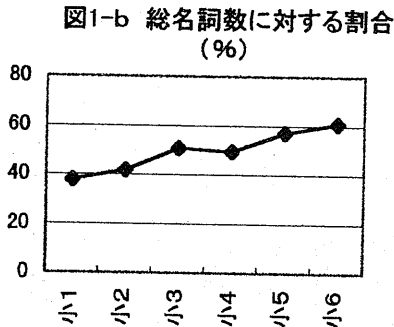
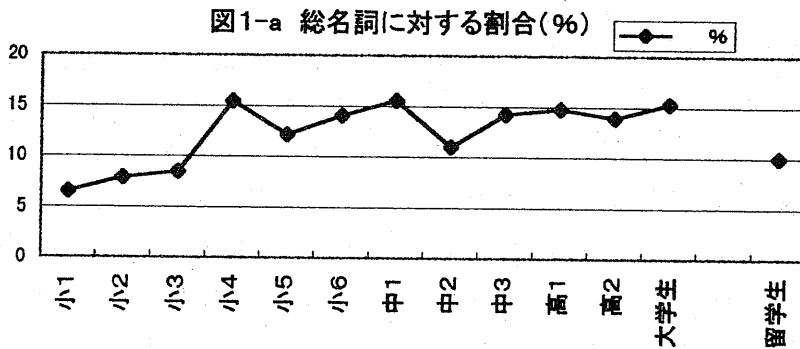
- ①付加型と内容補充型がそれぞれどのくらい用いられているか。
  - ②付加型を構成する被修飾名詞は修飾節に対してどのような関係にあるか。
  - ③内容補充型を構成する被修飾名詞にはどのようなものがあるか。
- それぞれの結果を内田の結果と比較し、考察を行う。

#### 4. 結果と考察

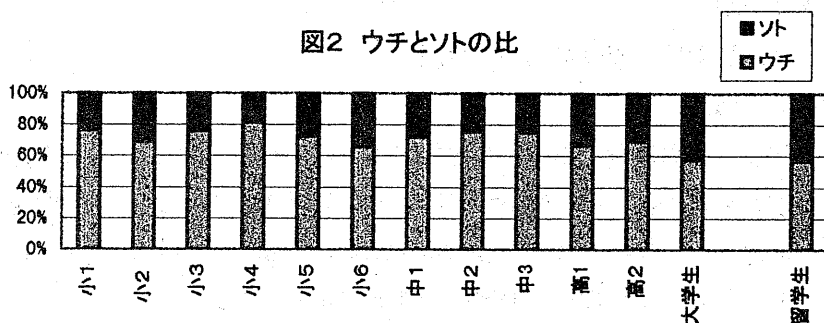
##### 4. 1. 母語における連体修飾節の発達

##### (1) 全体的な傾向

作文中の全名詞数に対する連体修飾節の割合は、学年の進行とともに増加している(図1-a)。内田(1996)の結果(図1-b)と比較すると、全体的に連体修飾節の割合が低いようだが、今回の作文は文集などに載せる作文と違い、十分に推敲されていないことが相違の原因の一つと考えられる。

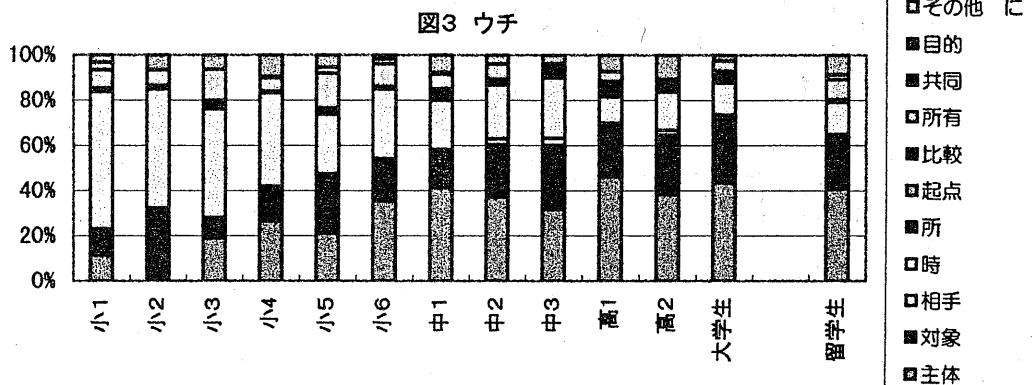


また、小学校1年生から大学生まで、全般的に付加型またはウチの関係（以下「ウチ」とする）にある連体修飾節のほうが、内容補充型またはソトの関係（以下「ソト」とする）より頻繁に用いられている（図2）。内田は小学校6年生まで学年が上がるにつれて「ソト」の比重が増すとしているが、中学生以降の観察では、明らかな傾向は見られなかった。しかしながら、「ソト」における被修飾名詞の使用語彙は広がりを見せていることから（資料参照）、学年に伴い「ソト」の表現が発達すると推察される。



## (2) 付加型（ウチの関係）について

連体修飾節内において、被修飾名詞が「主体」「対象」「時」の関係にあるものが、いずれの学年にも多く見られた。小学校低学年の作文に「時」の占める割合が多く、学年が進むにつれて減るという傾向は先行研究に述べられているが、本研究においても大学生に至るまで同様に観察された。「所」「所有」の関係にあるものは、小学校高学年になって用いられ始めるという内田の観察と異なり、本研究の資料では小学校1年生から用いられていた。これは、資料となった作文が「手」というテーマのもとで書かれており、「手がない人（所の関係）」や「手が不自由な人（所有の関係）」などの修飾節が多く現れたことによるものと考えられる（図3）。



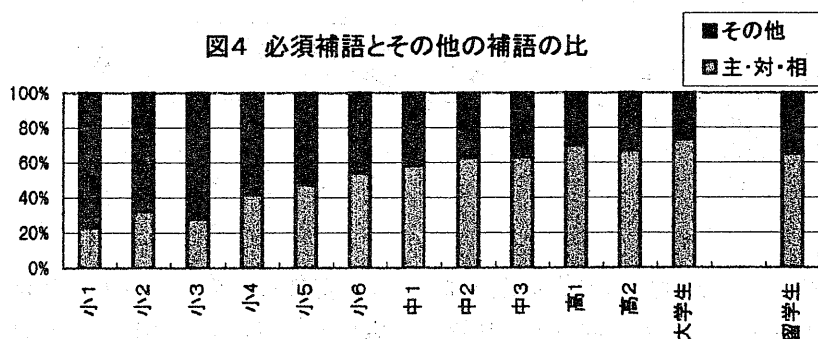
本研究で「ウチ」にあたる被修飾名詞について、井上(1976)は、日本語を含む世界の諸言語において、関係詞化を許す文法格の順位は、以下のとおりであると提案している。

主格 $\geq$ 目的格 $\geq$ 位置格「に」 $\geq$ 位置格「を」 $\geq$ 目標格「に」または「へ」  
 $\geq$ 位置格「で」 $\geq$ 助格「で」 $\geq$ 基準格「で」 $\geq$ 奪格 $\geq$ 所有格 $\geq$ 起点格 $\geq$ 随格  
 $\geq$ 理由格 $\geq$ 比較格

今回の資料から、成人とみなされる大学生の使用状況を見ると、「主体」「対象」などを表す主格、「対象」「相手」などの目的格、助格、所有格、位置格、目標格の関係の順に多く用いられており、上記の順位とほぼ一致する結果となっている。助格と所有格が上位であったが、井上は「順位で下のものが他を飛び越して関係詞化されることがある」と説明している。本研究の作文テーマの特徴として述べたように、「所有」の関係や「そのボタンを押す手」のような助格の関係が現れやすかったことが原因であると考えられる。

同様に、連体修飾節の発達過程においても、学年が低いほど、被修飾名詞化の傾向が高い主格や目的格の使用が多く、学年が高くなると、その他の格関係での修飾の種類および量が増すと予想されたが、全体として「主体」「対象」「時」以外の関係の出現頻度は低かった。

また、「主体」「対象」「相手」など必須補語である被修飾名詞の割合は、学年が上がるにつれて増え、小学校6年生の段階で全被修飾名詞の半数を越え成人では7割程度になることがわかった(図4)。



内田の小学生での調査の際にははっきりと現れなかったが、本研究では大学生まで調査の枠を広げることにより、連体修飾節内において必須補語の関係であ

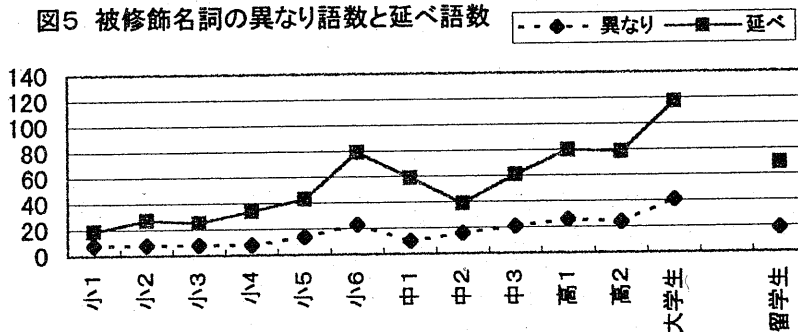
る「主体」「対象」「相手」を表す名詞の割合が、一定の値に向かって増加の過程をたどることが明らかになった。この一因として、その他の補語に属する「時」の関係にある名詞の使用の減少が、全体に対する必須補語の割合を引き上げたことが考えられる。内田の研究では、その理由を「食事をしているとき」の代わりに「食事中に」と漢語を用いて表現するなどの「語彙の発達に伴う表現方法の変化」としているが、個々の用例について、さらなる検討が必要であろう。

### (3) 内容補充型（ソトの関係）について

全学年にわたって、被修飾名詞「こと」「の」の使用が多い。学年の進行とともに「ソト」の延べ数は増加し、異なり語数も小学校1年生から大学生にかけて、増加の傾向が見られた（図5）。「ソト」の修飾節は被修飾名詞の内容を説明するという特色があるため、それを用いる側の構文力や語彙力のレベルと何らかの関連をもつものと考えられる。

また、学年が進むにつれて、より様々な語、特に抽象的な意味を持つ語や漢語が被修飾名詞として用いられるようになってきている。本研究においても、村上ほか(1997)による名詞の「具体から抽象へと向かう語彙習得の発達段階が顕著である」という観察と同様の結果が得られた。

図5 被修飾名詞の異なり語数と延べ語数



「ソト」のうち、普通の内容補充を意味の上から分類した場合「コト」を表す名詞だけが多く、あとの「発話」「思考」「感情」「行為」「知覚」の対象を表す名詞はどの学年でも共通して少なかった。これは本研究の資料となった作文がそれぞれ 400字未満からなるものであり、内田の 600～1500字と比べる

と絶対的に連体修飾節の数が少ないためとも考えられる。「コト」を表す名詞をさらに分析することや「ソト」の分類形式を変更する必要があると思われるが、これらは今後の課題としたい。

「ソト」のうち、相対的補充は小学生から大学生まで使用数自体が少なかった。小学校低学年では全く見られないが、小学校3年生以後徐々に用いられるようになり、用いられる名詞の種類も増えていくことが観察された。

#### 4. 2. 母語話者と学習者の比較

日本語学習者の作文には、連体修飾節の使用数自体も全名詞数に対する割合も、ほぼ同年代である日本人大学生に比べて少なかった。連体修飾節は、学習者にとって使いづらい表現形態であるといえる。しかし、比率においては、使用数全体に対する「ソト」の割合が43%と非常に高く、日本人大学生と同程度であった。学習者は、母語における知識や構文的能力では成人のレベルにあり、その母語知識を活かして作られた概念を日本語に翻訳するため、より複雑な表現を使用する傾向があると考えられる。被修飾名詞の種類も多く、抽象的な意味の名詞や漢語なども使われており、母語における連体修飾節の習得を反映しているものと思われる。

「ウチ」においては、必須補語である「主体」「対象」「相手」の占める割合は65%で、母語話者との大きな違いは見られなかった。また、「ソト」のほとんどが普通の内容補充であり、母語に相対的補充の連体修飾形式が存在しないことなどによる影響の可能性が考えられる。

#### 5. 今後の課題

本研究は、先行研究の分類に従って結果の異同を見たが、「ソト」の連体修飾節においては習得の過程が明確に現れないなど、分類に起因すると思われる不都合があった。今後、分類の形式を再考したい。「ウチ」においては被修飾名詞の修飾節内での格関係をより重点的に観察し、「ソト」においては被修飾名詞の抽象・具象性による区別をした上で分析をすることによって、より詳細な発達過程の検証を行えるものと思われる。

また、日本語学習者の習得過程を考える際には、被験者である学習者の日本語能力レベルを調査する必要がある。さらに母語の連体修飾節の知識がどのように影響しているのかを明らかにするため母語別に分析を行うことにより、実際の習得状況に沿った結果が得られるものと考えられる。



## 謝辞

有益な助言とご指導をいただいた長友和彦先生と内田安伊子氏に心から感謝する。

## 参考文献

- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 上』 大修館書店
- 内田安伊子 (1996) 「児童の作文に見られる連体修飾節についての縦断的研究」  
お茶の水女子大学修士論文
- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』 大修館書店
- 柴谷方良他 (1982) 『言語の構造 意味・統語篇』 第6章「統語現象Ⅲ」  
くろしお出版
- 寺村秀夫 (1981) 『日本語教育指導参考書5 日本語の文法(下)』  
国立国語研究所
- 寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集Ⅰ』 「連体修飾のシンタクスと意味」  
くろしお出版
- 成田信子・宗我部義則・田中美也子 (1997) 「作文能力発達に関する縦断的  
研究その一」平成8年度文部省科学研究費補助金基盤研究  
(B)(2) 研究成果報告書
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法-改訂版』 くろしお出版
- 村上博之・田中美也子 (1997) 「作文能力発達に関する縦断的研究その一」  
平成8年度文部省科学研究費補助金基盤研究(B)(2)  
研究成果報告書

(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科言語文化専攻2年)

【資料】被修飾名詞の内訳

小1	7 4 3 1	ため の ほう いみ、やくめ、しくみ、音、 かんじ	中1	22 13 12 4 2 1	こと の ため 気 場合、役目 必要、印象、結果、中
2	11 9 1	の こと ところ、ゲーム、やくめ、 もち方、気、ため	2	15 7 2 1	こと、 の 気 疑問、意味、生活、働き、方法、くせ、こと、感覚、中、世界、分、 部分、上
3	10 5 4 2 1	こと の ため いみ ばあい、気持ち 間、しょうこ	3	18 12 8 2 1	こと の ため もの、手段、前、通り、理由 行為、経験、力、場合、エピソード、あかし、必要、感じ、遊び、 傷、上、中、位置
4	12 11 5 2 1	の こと ため 前 立場、心配、わり、たび	高1	35 15 4 3 2 1	こと の ため 気 うち もの、自信、気持ち、感じ、様子、必要性、年齢、傾向、経験、上、 用途、役目、くせ、遊び、動き、度、以上、分、おかげ、理由、まま
5	14 9 4 2 1	こと の ため 気、ところ、かぎり 感じ、点、ふう、働き、 役目、はず、まま、通り	2	41 9 3 2 1	こと の 跡 可能性、動作、気、せい 機能、必要、ため、知能、技能、点、様子、風、感じ、姿勢、行為、 仕事、狂暴さ、上、間、理由、原因
6	26 20 10 2 1	こと の ため 役目、中、うえ 文章、知恵、気、意味、 義務、必要、目的、動作、 ところ、クセ、ほう、前、うち、 以外、分、せい、一方	大 学 生	40 22 6 7 3 2 1	こと の 気 ため 後 機能、行動、おかげ 描写、表現、質問、内容、意味、イメージ、映画、宿命、話、点、 力、タイプ、影響、方、愛しさ、やり方、おもしろさ、働き、作業、 感じ、意識、ぬくもり、方法、途中、限り、中、上、大部分、割、 きつかけ、わけ、まま、証拠
留 学 生	25 18 6 3 2 1	こと の ため 気持ち 表現、気 諺、説、意見、印象、場合、事実、状態、様子、習慣、かぎり、上、中、とおり			

被修飾名詞(ソト)の異なり語数と延べ語数

	小1	2	3	4	5	6	中1	2	3	高1	2	大	留
異り	8	8	8	8	14	23	10	16	21	26	24	41	19
延べ	19	27	25	34	41	79	59	39	61	80	78	117	69